



配布先: 文部科学記者会、科学記者会、名古屋教育記者会

2026年7月6日

報道機関 各位

患者に寄り添う看護を支える「良心的立ち止まり」 ～日本の看護実践から生まれた新たな看護倫理の視点を世界へ～

【本研究のポイント】

- ・世界初、日本人看護師の「良心的立ち止まり^{注1)}」を概念化：
多忙なケアの現場で、あえて一瞬判断を遅らせる「立ち止まり」が、言葉にならない患者の尊厳や脆さ(脆弱性)を察知するための、極めて重要な倫理的実践であることをナラティブ研究から明らかにした。
- ・看護倫理のパラダイムシフト:「正しい判断」から「日々の応答」へ：
倫理を単なる「白黒つける意思決定」としてではなく、患者や家族の揺れ動く痛切さに日々寄り添い、応答し続ける「生きたプロセス」として捉え直した。
- ・「和(Harmony)^{注2)}」の再定義:固定観念から「動的な倫理実践」へ：
日本の医療現場で重んじられる「和」を、単なる同調や現状維持ではなく、患者・家族・多職種との対話の中で絶えず交渉され、柔軟に再構成されていく動的な関係性として示した。
- ・効率化が進む医療現場へ、人が人をケアする「立ち止まる力」の重要性を提起：
標準化・効率化が加速する現代の医療システムにおいて、看護師が直感するジレンマや「立ち止まり」を孤立させず、社会や組織全体で支えていく仕組みの必要性を訴求。

【研究概要】

現代の医療現場では、AIの活用や業務の効率化・標準化が急速に進み、看護師には常に迅速な判断が求められています。一方で、患者や家族の言葉にならない思いや脆さ(脆弱性)に寄り添うことも看護の核心です。しかし、こうした実践は数値化やマニュアル化が難しく、看護師が日々の葛藤にどう向き合い、行動しているのか、その具体的なプロセスは十分に可視化されていませんでした。

名古屋大学大学院医学系研究科の田中 真木 講師は、日本国内の医療機関で働く多様な実践経験をもつ看護師12名から、約20時間に及ぶ語り(ナラティブ)を収集・分析しました。ナラティブ研究とは、人々が経験した出来事やその意味を「語り」として丁寧に分析し、実践の中にある共通した意味や特徴を明らかにする研究手法です。

その結果、看護師は倫理的葛藤に直面した際、判断を急ぐのではなく、自らの良心に照らして一度立ち止まり、患者や家族の脆弱性に応答するために関係性を見つめ直しながらケアを実践していることが明らかになりました。本研究では、この実践を「良心的立ち止まり」という新たな倫理的実践として提唱しました。本研究は、看護倫理を「正しい選択肢を選ぶための理論」ではなく、「患者の脆さに応答しながら現場で育まれる、実践そのものの倫理」として再定義するものです。効率化が加速する今だからこそ、看護師が良心に基づいて「立ち止まり、考え、対話できる実践環境」を組織や社会全体で守り、支えていくことが、結果として患者にとってより良い医療へつながります。日本発のこの新たなケアの視点は、これからの国際社会における看護倫理のあり方に重要な一石を投じるものです。

本研究成果は、2026年5月26日に国際学術雑誌『Nursing Ethics』にオンライン掲載されました。

図1 「良心的立ち止まり」がもたらすケアのプロセス（概念図）

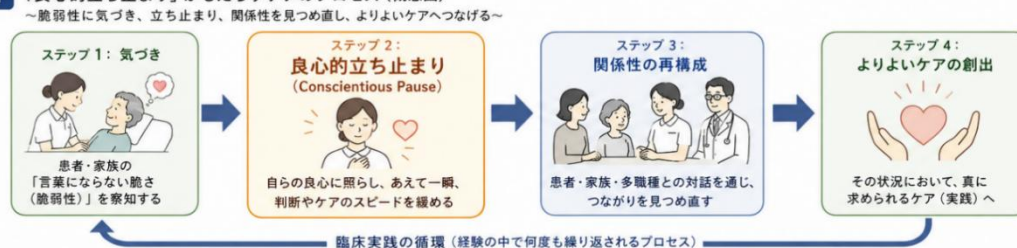


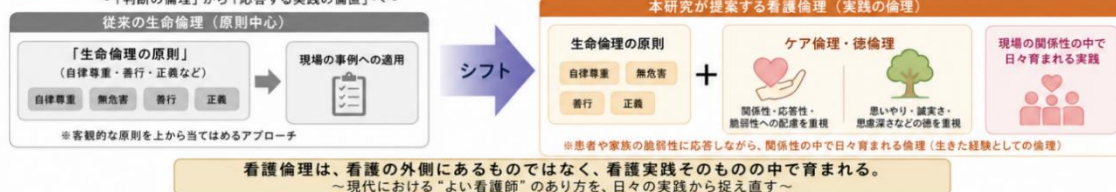
図2 「良心的立ち止まり」を構成する4つのテーマ（構造図）

～ナラティブから導き出された、多面的な性質～



図3 本研究が提案する看護倫理のパラダイムシフト（比較図）

～「判断の倫理」から「応答する実践の倫理」へ～



【研究背景と内容】

現代の医療現場では、迅速な判断や効率化が強く求められる一方で、患者や家族一人ひとりの思いや価値観に寄り添うことも、看護師の重要な役割です。しかし、このような看護実践は数値化やマニュアル化が難しく、看護師が倫理的葛藤の中でどのように考え、判断し、行動しているのか、その具体的なプロセスは十分に明らかにされてきませんでした。

本研究では、病棟、外来、手術室、フライトナース、診療看護師、専門看護師、看護管理者など、多様な領域で活躍する臨床経験4～38年の看護師12名を対象に、約20時間に及ぶナラティブ(語り)・インタビューを実施しました。ナラティブ研究とは、人々が経験した出来事やその意味を「語り」として丁寧に分析し、実践の中にある共通した意味や特徴を明らかにする研究手法です。

例えば、ある看護師は、

「患者さんやご家族が『家に帰りたい』と少しでも望んでいるなら、本当に難しいのか、一度立ち止まって考えたいと思いました。」

と語っています。

このような語りを分析した結果、看護師は多忙な中でも思考を止めることなく、自らの良心に照らして一度立ち止まり、患者や家族の脆弱性に応答するために状況や関係性を見つめ直しながらケアを実践していることが明らかになりました。本研究では、この積極的な倫理的実践を「良心的立ち止まり(Conscientious Pause)」として提唱しました。

また、日本人看護師の語りからは、単に対立を避けることではない、「和(Harmony)」

のあり方も見出されました。現場の看護師は、患者・家族・医療者との関係性を大切にしながら、その場その場で関係を調整し、ともによりよいケアを創り出していました。本研究では、「和」を固定的な文化的特徴ではなく、人と人との関係性を主体的に築き直していく「動的な倫理実践」として捉え直しました。

【成果の意義】

本研究は、日本の豊かな看護実践から抽出された「良心的立ち止まり」と「和」という独自の視点を、国際的な看護倫理研究の舞台へと広く発信するものです。

これまでの医療倫理(生命倫理)で主流だった「客観的な原則やルールを現場に当てはめる手法」にとどまらず、患者との地続きの関係性の中で育まれる「ケア倫理^{注3)}」や「徳倫理^{注4)}」の視点から看護倫理を再構成した点に、本研究の極めて高い学術的独創性があります。

標準化や効率化、さらに AI の活用が進む現代の医療において、人が人をケアするときの「立ち止まる力」を社会的に守ることは、最終的に患者の尊厳とより良い医療を支えることにつながります。本研究は、看護師個人の努力や不利益(モラルディストレスなど)に依存するのではなく、医療者が良心に基づいて立ち止まり、考え、対話できる「実践環境(組織風土・制度)」を社会全体で整えていく重要性を強く提起しています。本研究は、科学研究費助成事業(科研費)基盤(C)[課題番号:JP24K13670]の支援を受けて実施されました。

【用語説明】

注1)良心的立ち止まり(Conscientious Pause):

あえて「間(ま)」をとり、最善のケアを模索する行為

看護師が倫理的な葛藤や迷いに直面したとき、判断を急ぐのではなく、一度立ち止まって患者や家族の思いや脆弱性を見つめ直し、自らの良心に照らしてより良いケアを考える実践。

注2)和(Harmony):

対話を通じて関係性を紡ぎ直す、動的な実践

本研究では、単なる同調や対立を避けることではなく、患者・家族・医療者が互いの立場を尊重しながら、対話を通してより良い関係やケアを築いていく実践を意味する。

注3)ケア倫理(Ethics of Care):

「正しい答え」ではなく「相手との関わり方」を重んじる倫理

人との関係性や相手への応答、脆弱性への配慮を重視する倫理の考え方。正しい答えを導くことだけでなく、「どのように相手と関わるか」を大切にします。

注4)徳倫理(Virtue Ethics):

規則の遵守ではなく、ケアを実践する人の「誠実さ」に着目する倫理

規則や原則だけでなく、思いやりや誠実さ、思慮深さなど、実践者の人格や徳に着目する倫理の考え方。

【論文情報】

雑誌名:Nursing Ethics

論文タイトル:Conscientious pause and harmony in nursing practice: A narrative analysis

著者:Maki Tanaka

DOI: <https://doi.org/10.1177/09697330261451367>



東海国立大学機構は、岐阜大学と名古屋大学を運営する国立大学法人です。
国際的な競争力向上と地域創生への貢献を両輪とした発展を目指します。

東海国立大学機構 HP <https://www.thers.ac.jp/>

